戦後人物誌

三好徹

文春文庫 121—11

戦後人物誌

定価はカバーに表示してあります

1986年8月25日　第1刷

著者　三好　徹

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102

TEL 03・265・1211　63、4/23

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-712111-5

文春文庫

戰后人物讀

三好稂

目次

踊る神様（女役座一代）――北村　サヨ　7
消えた参謀――辻　政信　92
法廷の拳骨――大川　周明　148
幻のコミュニスト――伊藤　律　176
策士――広川　弘禅　204
アラビア太郎の勝負――山下　太郎　233
鉄腕――スタルヒン　259
いまだ山麓――山田　道美　288
オリオンの星――岡本　公三　311
文庫版のためのあとがき　339
参考文献一覧　343

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong

戦後人物誌

踊る神様（女役座一代）――北村サヨ

一

昭和十九年五月四日のことである。山口県熊毛郡田布施町の農家の主婦で四十四歳になる北村サヨは、朝ふと目をさましたときに、自分の肚に何か異常を感じた。

異常といっても、痛いとか痒いとかいうのではなかった。肚の中に何かえたいの知れないものがどっしりと根を下ろしている感じなのである。そのため頭が張り子のようになり、意識もぼんやりしてきた。いったい、どうしたことだろう、と思ったが、それさえも、はっきりと考えることができなかった。いってみれば、何かを思考する能力が失われた感じであった。

ほぼ二年前から、彼女は、氏神の八幡宮に願をかけて丑の刻参りを続けていた。きっかけは、彼女の家の火事であった。牛小屋が焼けただけなのだが、責任感の強いサヨはそのことで悶々としていた。すると、隣村に住んでいた平井憲竜という祈禱師が、

「火事は放火で、その犯人は、あなたが一年間参れば必ず見つかる」

といった。

サヨは毎夜水をかぶって身を清め、熱心にお参りを続けたが、犯人はいっこうに見つからなか

った。しかし、彼女はそのことに不満はもたなかった。逆に、自分にこれだけの行(ぎょう)ができたのも放火犯人のおかげだった、と考えるようになり、戦地にいる一人息子の義人(よしと)の無事を祈って、夜参りを続けていた。

肚の中に何かが入ったように感じ、頭がぼんやりするのは、その疲れが出たのかもしれなかった。サヨはひじょうな働き者だったが、その日は、終日ぼんやりして過した。夫の清之進は、口うるさい男だったにもかかわらず、その日に限って、文句をいわなかった。

二十歳のサヨが北村家に嫁(とつ)いできたのは、大正九年であった。清之進はすでに三十七歳、母親のタケといっしょに暮していた。タケは、村でも有名なやかましやで、かつまたケチン坊だった。五月の田植え前に嫁をとり、田植えがすむと、食わせるのがもったいないといって、嫁をいびり出す。そして、秋の収穫前に、新しい嫁を清之進に迎えるが、刈入れが終ると、食わせず着せず寝せず、で追い出してしまう。そのため清之進の嫁は、サヨ以前、三年間に六人もかわっていた。

サヨの生家は浴本(えきもと)といい、日積村の裕福な農家だったが、子供のころから勝気なサヨは、タケの嫁いびりに耐えぬいて、頑張りとおした。朝早くから夜まで田んぼで働き、夜は夜で俵あみの仕事をやらされ、姑(しゅうとめ)につかえ、夫につくし、子供を育てた。いわば修身の教科書に出てくるような、模範的な主婦だった。だから、清之進としても、サヨが一日くらいぼんやりしたからといって、文句もいえなかった。

五日の朝、サヨは目をさますと、いつもの習慣で神棚に向って祈った。すると、どうしたことか、目に見えない強い力に曳(ひ)きずられるようなかたちでからだが動き、サヨは夫の枕もとに立った。

夫はまだ眠っていた。

不意にサヨは足をあげて、夫の枕を蹴った。と同時に、肚の中から言葉がひとりでに噴出してきた。

「おい、清之進、おサヨが極寒のさなかも、朝水かぶり昼水かぶり、真心こめてあげた祈りは、たしかに天に届いたぞ。それなのに、お前だけが祈りもしないで、枕を高うして寝ているとは何事だ。さア、起きて祈れ」

清之進は仰天した。

それはそうであろう。なにしろ前日までは嫁にきて以来、口ごたえひとつしなかったサヨが、乱暴にも枕を蹴とばし、荒っぽい言葉を吐いたのだ。

サヨは、あっけにとられている清之進を残して、すっと行ってしまった。彼には、たったいま起きた出来事が、現実のものとは思えなかった。

一方、サヨの方は、自分の行為に対して、まるで自覚がなかった。もっと厳密にいうなら、自分の意思から出た行為ではなかった。すべては、サヨの肚の中に居坐った何かが命じたのだった。肚の中の何かは、サヨに、ああせいこうせい、と命令するばかりか、思いもかけないことまでいわせる。ふと外で会った旧知の人に、

「あんたみたような性根だまの腐ったやつと話をすると、おサヨまでがけがれるから、わしゃ、いやいの」

とにらみつけてぷいと顔をそむけさせる。

また、誰に対しても、決してさんづけをしなくなり、呼びすてをするようになった。

サヨは好きこのんで、そうしたわけではなかった。

肚の中の何かが命ずるとおりにしないと、それは、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong

（おサヨ、おれのいうことをきかないのか。それならおれが逃げるときに、腹をけり破って内出血、頭をけり破って脳溢血、どっちがいい）

とどなりつける。同時に、サヨの頭や腹はキリを刺しこまれたように痛み出すのだ。

「痛い！」

サヨが身をよじって苦悶すると、肚の中の何かは、

（それでは、いうことをきくか）

と迫ってくる。サヨは、

（ききます）

といわざるをえないのだった。

（よし、それでは、心の行をせよ）

と肚がいった。

サヨは、井戸端へ行って、水ごりをはじめた。すると肚は、カラカラと笑って、

（水をかぶるばかりが行じゃないわい。水をかぶるが行じゃったら、川の魚はみな天にのぼるはずじゃが、一生涯川につかっていても天にはのぼれん。水をかぶると同時に、心の行をせい。神行をせよ。信仰ではない、神に行く神行だ。魂が清らかになって神に行く。そうなれるように合正せよ。掌を合わせる合掌じゃない。神と人とが正しく合わさる合正だ）

（神行に合正……）

（そうだ。それから名妙法連結経を百口となえるのだ）

（名妙法連結経？）

（世間の人は、おサヨのことを気違いじゃ神経じゃ信仰のぼせじゃというだろうが、名妙は、少

し名のある女、それがいま天から法の連絡をとって結する経ができる。われ（お前）がその少し名のある女よ。どうだ、わかったか）

（わたしが少し名のある女？）

（そうじゃ。われを初めて見たときのことをいうてやろうか。われが生れるとき、八幡宮がわれの頭にとまって、みんなこの女を助けえ、これを助けねば助ける者がないというものだからきてみると、われの顔じゃったが、昔からおもしろい女じゃったのう。その後は、つぎつぎにわしの家来の神をつかわしてあら鉋をかけさせたが、いよいよみがき鉋をかけに、わしがきたんじゃ）

（それじゃ、あんたは神様か）

（おれの女房の天照皇大神が、あなたのお国はよく乱れましたのう、とやかましくいうが、おれは、待て待て、そのうち時がくる、と待たしてあるのだ。おサヨ、早く行をせい）

と肚の中の何かはいった。

近所の人たちは、

「北村さんは神経になった」

と噂しあった。神経になったというのは、気がふれたという意味の方言である。

そう思われたとしても、やむをえない状態が続いていた。なにしろ、それまではコマネズミのようにくるくる働いていたサヨが、ばったり働かなくなり、寺は浄土真宗なのに、「名妙法連結経、結経、結経、結経……」

とやっているのだ。

サヨにしてみれば、日蓮宗の南無妙法蓮華経をとなえているわけではないが、聞いている人に

は、そうとはわからない。

「気の毒に」

と、近所の人たちは、サヨを見ると目をそむけた。

（おサヨ、われの家は空家みたいじゃのう。草がぼうぼうに生えている。行をしているために草もとらんといわれたのでは、おれの恥じゃから、きょうは草をひこういのう）

と肚はいった。

サヨは雑草をかりはじめた。肚が調子をあわせるように、

（こうりゃ、こうりゃ）

と掛け声をかける。

雑草はおもしろいほどにとれた。

（きょうはそこまでいい）

肚はとめたが、調子にのっているサヨは、なおも草とりを続けた。ところが、どうしたことか、それまでは根ごときれいにとれていた草が、大地にへばりつくようで、さっぱりぬけない。力をこめても、きたなくむしれるばかりであった。

（おれが力をそえてやりゃこそ、楽にひけたが、自我を出すと、いくらがんばっても、草はぬけまいが）

と肚は笑った。

サヨの肚に鎮座しているものは、神秘的な力をもっているようだった。

ある日、サヨのからだは、前後左右に激しく揺れた。

（おサヨ）

人のことをおサヨおサヨと呼びすてにするなんて、とサヨはいまいましかったが、
（おサヨ、これが何かわかるか）
（わからん）
サヨはぶっきらぼうに応じた。
（わからんじゃろうが、これはわれの息子の乗っている輸送船ぞ。前に傾いたり後に傾いたりしとるが、いま魚雷が船の下を通りぬけた。十ぱいが十ぱいとも沈むとはいわぬが、九はいまでは沈んでも、義人の乗っとる船だけは、沈めさせはせんけんのう。われが行をすりゃこそじゃが、こんどの世界は、親の真心が天に通じて、わが子の生きる道がつく世の中になる。おサヨの息子が、こゆびの一本でも怪我したら、天父はおらぬと思ってもよいぞ）
（天父？）
（お天道さまというが、天父が本当じゃ。いいか、宇宙を支配する神はひとつしかありゃしない。キリストのいう天なる神も、釈迦のいう本仏も、みなひとつぞ。それが天照皇大神じゃ。南瓜というたりかぼちゃというたりとうぶらというのと同じじゃ）
そんなものか、とサヨは思ったが、肚の講釈はなおも続いた。
（いいか、天には、えこもひいきもありゃせんが、うじの世界はそうじゃない）
（うじの世界？）
（蛆虫どもの世界、つまり人間の世の中のことをいうんじゃ）
と肚はいった。
肚の説明は、理路整然としていた。出征軍人を送り出すときには、
「銃後は守りますから」

といっておきながら、みんなが利己に走って、闇で儲けたがり、悪いことをする蛆虫が多い。前線で死んだ者の霊はうかばれずに、帰還してくるが、そのさい爆弾もいっしょに持ってくる。B29が落している爆弾はそれなのだというのである。

それだけではなかった。肚は、おそろしいことを口走りはじめた。

（蛆の世界じゃ、家内安全、商売繁盛、死んでも命があるように、悪人正客、他力の信心、蛆の好くようなことをいうて、蛆の金をとりあげて、己が神仏を売りもの食いものにしておるのが宗教家として通っておるのじゃが、おのれの心のけがれは、おのれの肚で掃除して、天のめがねにかなうまで魂みがいて、天まで上って行くよりほかに道はないのじゃ。しかし、そんな真心もちは、めったにおりゃせん。伊勢の宮司のバカどもが、おれらがとっくに逃げ出したのも知りやせん。昔は神々しいといいよったが、いまは神なきあとの神屋敷、行ってみいや、神々しゅうも何ともないぞ。昔はようきよったが、いまじゃ、年に四人くらいじゃ）

（うそ！　あんなに沢山の人が参っておるのに）

（バカいえ。昔は本当に参りにきよったが、いまのは遊びにくるのいや。旅館に泊って芸者をあげて、宮司は宮司で、賽銭をとりあげるのが仕事のように思うとる。そうなったらおれらは居やしないのだ）

（そんな乱暴な！）

（なにが乱暴なものか。昔、神武天皇は、天降って根の国を治めよといわれ、国民と手をひん握って治めたればこそ治まったが、いまじゃ二重橋から四重橋、六重橋までかけて、箱入りになって釘止めにされ、目張りされて天井に放りあげられ、置物になっている。生神さまでも現人神でも何でもないぞ）

と、いいたい放題に肚はいった。
なにしろ時代が時代である。肚の中でいうぶんには、特高警察にも憲兵にも聞こえないが、声に出していえば、無事ではすまないだろう。
ところが、サヨは、祈禱師の平井に会ったとき、肚の命ずるままに、これを喋ってしまった。
平井もこれにはびっくりした。
「北村さん、神様がいわせるにしても、皇室の悪口だけはいわんようにしなさいよ。いうたら危いですよ」
と忠告した。
サヨの顔が、紅をそそいだように朱くなった。
「やかましい。おサヨは女でさえ、肚をつくって神行をやっているのだ。ぐずぐずぬかすな」
と大喝した。
平井は、サヨが完全に精神異常をきたしたと思った。
サヨが外に出ると、肚が語りかけた。
(おサヨ、われが皇室の悪口をいうて歩いていると、いつかつかまって死刑になる。義人は責任を感じて、腹を切って死ぬる。清之進も気が違うて死ぬる。われのところの目くされ財産は、親類の蛆どもが分けどりにするようになるぞ)
サヨにしてみれば、心外であった。天皇をボロくそにいうのは、肚なのである。それなのに、肚は、そんなことをいって歩くと死刑になる、と脅迫がましいことをいう。
(わしは邪神に使われちょるのか、正神に使われちょるのか)
(正神じゃがのう、誰かが犠牲になって、国救いをやらねば、この国は救われんのじゃ)

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong